

中上級学習者のスピーチの上達に向けた授業とは ——ピア・レスポンスと評価活動を授業に取り入れた試みから——

鹿目葉子

1. はじめに

日本語教育において、口頭コミュニケーション教育は最も重視される指導事項の一つであり、そこには一般的な「会話」から聴衆に向けて公的な発話を行う「パブリックスピーキング」まで含まれる(深澤・他 2012)。この「パブリックスピーキング」には様々な口頭コミュニケーションがあり、そのなかにスピーチがある。本実践の対象校(以下、対象校)では、4年次にスピーチの授業があり、筆者は前期(6月~9月)の授業を担当した。担当にあたり、従来のスピーチの授業について聞き取り調査を行ったところ、スピーチには正しい文法が求められるという考え方に固執していることや構成面および心理面における指導が不十分であったことが窺えた。対象校では、毎年10名程の学生が日本へ留学する。また、日本企業で働くことを希望している学生達も多く見られる。留学先の学習評価に含まれる発表点や、企業内での会議や顧客対応におけるプレゼンテーションで必要となる表現力を考えると、スピーチは学生達に関わりのある大切な授業であることがわかる。そこで、従来の授業の問題を解決するために、①スピーチにおいて大切であるスピーチプラン(國分 2001)を重視する、②自分自身のスピーチを上達させることにつながる批評(評価)(東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会

1995)の時間を取り入れる、③スピーチの研究でも好ましい結果を得ているピア活動を取り入れる、以上の3点を考慮にいたした授業を試みた。本稿では、その結果と今後の課題を報告する。

2. 先行研究と本実践の目的

スピーチとは、場の目的や趣旨に即し、一人の話し手が多数の聞き手に対して行う独話の一形態のことである(大田 2009)。土岐(2001)によれば、スピーチは四技能が表裏一体化しており、スピーチとして話すということは、ある内容について書くことでもあり、聞き手を意識して自分の話し方を聞きながらモニターしているという側面を持つものだという。國分(2001)は、このスピーチにおける大切な点としてスピーチ原稿を執筆する前のスピーチプランを挙げている。これは、トピックの選定、要旨の設定、柱立ての設定、資料の追加(文章の肉付け)、結論の設定に分けられ、作文における構成に等しい。また東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会(1995)によれば、積極的な聞き方がスピーチには大切であり、他人のスピーチの良い点や悪い点をよく観察することが自分自身のスピーチを上達させることにつながり、建設的な批評へ向けての第一歩であると述べている。さらに、アンケートや評価表などのフィードバックもスピーチの大切な

要素と捉えられており、中上級学習者のスピーチ指導の場合、樽田（2000）によれば聞き手を常に意識し聞き手のフィードバックを考慮した指導が効果的であるという。そして、藤長（2001）によれば、学習者同士の評価は、よいスピーチとは何かを考えさせる機会になり、また、ビデオを使った自己評価も効果的な評価方法だという。この「学習者同士」をピア・ラーニング⁽¹⁾と捉えた場合、中国の重慶大学日本語学科で開催された「グループ・スピーチコンテスト」（藤田・フランプ 2009）や、即興スピーチにピア活動を取り入れた研究（グエン 2009）からピア・ラーニングの好ましい結果が挙げられている。それらは、新しいことを発見できた喜びや達成感を通しての「日本語が上達した」という実感、スピーチの「内容」、「構成」、「インターアクション」における改善や日本語を話す際に感じる不安が軽減したことである。そこで、従来のスピーチの授業に対する聞き取り調査結果を問題として提起し、それらを解決するために上記の先行研究を踏まえてスピーチの授業づくりを試みることにした。なお、スピーチプランを作文の構成とし、スピーチの原稿を作文と捉えることからピア・ラーニングの中のピア・レスポンス⁽²⁾を取り入れた。その際、使用言語は日本語としたが、詳細な説明が必要な場合にかぎりタイ語も使用可能とした。

本稿では次の4点について明らかにし、その分析結果および学習者に課したレポートからスピーチが上達するための授業について考察することを目的とする。

1. ピア・レスポンスは学習者にどのような効果をもたらしたのか
 2. 自己評価および他者評価から学習者は何を学んだのか
 3. ビデオ撮影は学習者のスピーチにどのような影響を与えたのか
 4. 他者評価のみと両者の評価を行ったスピーチではどのような相違があったのか
- 次章ではその実践を報告する。

3. 実践概要

3.1 学習者の背景

筆者が担当した2013年度前期（6月～9月）スピーチ授業の履修者はタイの国立大学4年生と5年生である。4年生15名（男性1名、女性14名）、5年生5名（女性5名）が履修し5年生は全員1年間の日本留学経験者である。また、4年生のうち10名はスピーチの授業終了後、10月に日本へ留学した。学習者のうち、14名は日本語能力試験N2に合格しており、1名はN1に合格していることから、中上級学習者といえる。

3.2 授業の流れ

授業は、1コマが60分であり週に3コマある。本実践では、批評（評価）の時間に自己評価と他者評価を取り入れ、その効果を調べる試みから授業を前半と後半⁽³⁾に分けた。前半の授業では他者評価のみを実施、後半の授業では他者評価および自己評価を実施した。まず前半の授業は

表1のとおりである。1コマ目は教師が提示したトピックについてのスピーチプランを各自が作成する。対象校では毎年、授業の前半終了前にスピーチコンテストが開催され、トピックは対象校の日本語教師達が決める。そのため、スピーチコンテスト前までは教師側がトピックを提示し、その後は学習者達に話したいトピックを各自選択させた。ピア・レスポンスは、表1のとおり2コマ目の授業前半の30分と3コマ目の授業前半の30分に取り入れた。2コマ目のピア・レスポンスでは各自作成したスピーチプランをお互いが説明し、コメントおよびアドバイスをやる。その際、「要旨がわかりやすいか」、「構成がしっかりしているか」、「データ等の資料は十分であるか」、「改善した方が良いと思う点」、「どう改善すべきか」等の内容・構成面に注目させた。

3コマ目のピア・レスポンスでは執筆した原稿⁽⁴⁾をお互いが読み、コメントおよび改善点のアドバイスをする。その際、「文法が正しく使われているか」、「言葉の選択は正しいか」、「良いと思う点」、「わかりにくい点」等の文法面、内容・構成面に注目させた。なお、ピア・レスポンスの時間は各学習者につき約10分から15分とした。原稿の作成終了後、各自スピーチの発表を行い他者評価をする。他者評価はスピーチを聞いた後、話し手に対して質問および感想を述べるものと、評価シートに評価マークおよびコメントを書き込むものと2つに分けた。

表1 前半の授業

週	コマ	内容
第1週	1	教師から提示されたトピックについて、スピーチプランを作成する。
	2	ピア・レスポンス (授業前半の30分) ピアでスピーチプランを発表し、コメントとアドバイスを行う。
	3	ピア・レスポンス (授業前半の30分) 原稿を読み合い、コメントと改善点のアドバイスを行う。
第2週	1~3	発表および他者評価

なお、第3週以降も同様である。

次に後半の授業であるが、ピア・レスポンスおよび他者評価に関しては前半の授業と同じである。ただし、毎回のスピーチ発表を各自にスマートフォンあるいはiPadを利用して撮影させ自己評価をさせた。後半の授業では各自発表を3回⁽⁵⁾実施し、本授業(全16週)終了後に自己評価と他者評価を基に自分のスピーチについて分析させレポートを提出させた。

なお、学習者の心理的不安を軽減するため、ピアを決める際に教師は指示を与えず学習者同士で決めさせた。

3.3 使用したシートについて

図1は國分(2001)の考えを基に筆者が作成したスピーチプランのシートである。ここで書いた

内容を基にスピーチの原稿を書くよう指示した。

スピーチプランシート	
スピーチのタイトル：	
要旨：	資料の追加（文章の肉付け）
柱立て	結論
	その他

図1 スピーチプランのシート

学習者がスピーチプランに書き込む必須項目は、スピーチのタイトル、要旨、柱立て、資料の追加、結論およびその他である。各項目の内容は以下のとおりである。

1. スピーチのタイトル：スピーチのテーマであり、自分がよく知っているもの、自分が興味のあるもの、聞き手にも興味のあるもの、聞き手の役に立つもの、から選択をさせた。
2. 要旨：自分が一番言いたいことであり、タイトルに関して見たこと、感じたこと、聞いたことなどを箇条書きさせ、最終的にワンセンテンスで要旨をまとめさせた。
3. 柱立て：要旨を伝えるための柱（手順）である。自分が一番言いたいことが効果的に伝わるように話す順番を考えさせ、箇条書きさせた。
4. 資料の追加：各柱立てに肉付けをしていく。肉付けとは個人体験、他人の体験報告、統計資料、権威者の意見、たとえ話などであり、留意点は肉付けの資料を多くしすぎないことである。
5. 結論：スピーチのまとめであり、自分が一番言いたいことを具体的に書くよう指示した。
6. その他：スピーチで使用する資料やスピーチの導入の仕方などをメモさせた。

図2の他者評価シートは「内容」、「パフォーマンス」、「その他」の3項目に分けられており5段階⁽⁶⁾で評価をする。まず、「内容」であるが、積極的な聞き方を促すためにスピーチプランで考えさせたことを意識的に聞かせるようにした。パフォーマンスは、発音と態度に分け、建設的な批評は「その他」に書き込ませた。

発表者：		
評価内容		評価 (◎/○/△/▲/×)
内容	主題がはっきりしていましたか？ (発表者が一番言いたいことがわかりましたか)	
	自分の体験や事実を話してましたか？	
	話す順番はよかったですか？ どんな順番で話してましたか？ 例) あいさつ⇒主題⇒本題⇒結論⇒あいさつ あいさつ⇒	
パフォーマンス	発音：イントネーション、声の大きさ、スピード、ポーズ	
	態度：ボディアクション、アイコンタクト	
その他 (感想、アドバイス)		

図2 他者評価シート

【目標】		
1	2	
番号	到達度	到達度評価の理由
1	%	
2	%	
評価内容		評価 (◎/○/△/▲/×)
パフォーマンス	発音：イントネーション、声の大きさ、スピード、ポーズ	
	態度：ボディアクション、アイコンタクト	
気づいた点・良かった点・改善点		

図3 自己評価シート

図3は自己評価シートである。スピーチ前に目標を書かせ、スピーチ後、その目標に対する到達度(%)と、その評価理由を書かせた。また、撮影したビデオを再生しパフォーマンスについての評価、ビデオを見て気づいた点、良かった点、改善点も書き込ませた。

3.4 分析方法

2. に挙げた 1. ピア・レスポンスは学習者にどのような効果をもたらしたのか、2. 自己評価および他者評価から学習者は何を学んだのか、3. ビデオ撮影は学習者のスピーチにどのような影響を与えたのか、4. 他者評価のみと両者の評価を行ったスピーチではどのような相違があったのか、を探るためアンケート調査および半構造化インタビューを実施した。その分析結果および授業のまとめとして課した学習者のレポートから、スピーチが上達するための授業について考える。

4. 結果と考察

4.1 アンケート調査および半構造化インタビューから

アンケート調査における以下の学習者のコメントは、原文のままである。

まず1であるが、学習者のうち17名がピア同士によるスピーチプランと原稿チェックは良いと考えており、役に立ったと回答した。その理由として、「正しい文法や構成の仕方がわかる」、「相手に説明しながら自分が言いたいことが整理される」、「アイデアが浮かばない時にアドバイスがもらえる」、「モチベーションが高くなる」、「相手に理解してもらうための言い回しを考えるようになった」、「相手の原稿を読むことで読解力がつく」、「自分のスピーチプランを相手に説明しているうちに、話すことに対する恥ずかしさがなくなった」などを挙げた。

「正しい文法や構成の仕方がわかる」と回答した学習者にその文法が本当に正しいのかをどう判断するのか質問したところ、「相手の文法の知識以外に、お互い不安な場合は一緒に電子辞書やインターネットで調べる」と答えた。上記の回答から、ピア・レスポンスは文法や構成の修正、新しい考えを得るツール、伝え方の方法や読解力を養うという学習面だけではなく、心理面においてはモチベーションを高め、話すことの恥ずかしさを軽減させる役割を果たしていることがわかる。一方、残りの3名は、「ペアワークは良いと思うが、文法は先生に直してもらいたい」、「友だちを傷つけないので、率直なコメントがいえぬ」、「スピーチの内容がわかってしまうので、おもしろみがなくなる」と答えた。

次に2の自己評価から学んだこととして、「目標を決めて、スピーチをするべきこと」、「自分の利点、弱点および反省点」、「自分が聞き手にどう映っているのか」などを挙げた。一方、他者評価から学んだこととして、「ボディアクションは聞き手のテンションをアップさせること」、「次のスピーチにするべきこと・改善点」、「聞き手に自分のスピーチがどう思われているのか」などを挙げた。つまり、自分のスピーチを客観的に見ることや聞き手の反応を知ること、良いスピーチをするために何をすべきかを学んだことがわかる。

続いて3であるが、全授業終了後、ビデオ撮影をした感想を聞いたところ、学習者全員がビデオ撮影は良いと回答した。その理由として、「自分の変化が感じられ、回を追うごとに改善できていることを見て喜びを感じられるから」、「改善点がより詳しく明確にわかるから」、「他者評価だけでは信用できない部分も自分の目でみて確かめることができるから」、「ビデオを撮影していることで、内容をさらに深めたい、まとめもしっかりしたい、文法もきちんとチェックしておきたいという意欲が増したから」等を挙げた。つまり、ビデオ撮影はスピーチに対する意欲をかきたてるだけでなく、視覚を通して自分のスピーチの改善点等を明確に即座にわからせる効果があることがわかる。また、学習者はビデオ撮影を他者評価の信憑性の確認として使っていたこともわかった。

最後に4であるが、学習者全員が他者評価のみのスピーチよりも自己評価と他者評価の両方を

行ったスピーチの方が良いスピーチができると回答した。その理由として、「自分のスピーチを両方の面から知ることができ、さらにいいスピーチをしようという気持ちになるから」、「スピーチの内容や自分が話すことをきちんと考えるようになるから」、「両方の評価をすることは、自分だけではなく相手にも役立つものだから」等を挙げた。

つまり、他者評価のみよりも自己評価および他者評価を行うほうがスピーチに対しての意欲が増し、スピーチに対して真剣に考え向き合っていることがわかる。

4.2 学習者のレポートから

本授業終了後、授業のまとめとして各自のスピーチを分析および考察させるレポートを課した。その際、本授業を通して学んだことや感じたこと、気づいた点や改善点なども自由に記述させた。

学習者自身によるスピーチの分析結果を見ると、14名が「スピーチが上手になった」、4名が「少し上手になった」、1名が「あまり上手にならなかった」、1名が「あまり変わらなかった」と評価していた。「スピーチが上手になった」14名は、「構成が上達した」、「主旨が明確になった」、「伝えたいことが伝えられるようになった」等、内容と構成の変化から自分のスピーチに対して上達したと分析していた。「あまり上手にならなかった」1名は、練習不足が原因であると考えており、「あまり変わらなかった」1名は、他者からの評価が毎回同じであることが問題であると分析していた。

次に学習者のレポートに記述されていたコメントであるが、学習面と心理面に分けられた。学習面では、「アドバイスを聞くことが大切だとわかり、きちんと聞くよう心がけた」、「原稿を書くスピードがあがった」、「どのような内容がいいか、どういう話し方がいいかを考えるようになった」、「スピーチの原稿を考えて、どのようにまとめたらいいいかを考えることが楽しくなった」、「どういうスピーチが上手で、どういうスピーチが上手ではないのかを判断することができるようになった」等が挙げられた。

心理面では、「回を重ねるごとに聞いてもらえることが心地よくさらに話したくなった」、「動画は後で改善点がわかるので、いろいろなスピーチ方法を考えチャレンジする気持ちがわいた」、「自信がもて、人前で話すことに恥ずかしさがなくなった」等が挙げられた。また、「仲が良い友達の本当の気持ちや考え方を発見でき、その友達にさらに親近感がました」、「教師が学生主体に活動させたことで、自分で何とかしなければという気持ちを持たせ、それが学習意欲につながったのは良い」という感想も述べられていた。

さらに、これらの肯定的なコメントのほかに、「聞き手の反応も動画にとれば、さらにいいスピーチになる」、「同じタイトルでそれぞれの人の考え方の相違を知ったり、違うタイトルでチャレンジしたりするとおもしろいと思う」、「毎回、違う人とペアを組んだ方がいい」、「他者評価の際、そのように評価した理由も書かせたほうがいい」、「他者評価は1~5の点数で評価させた方が評価が明確になる」という提案もあった。

4.3 本実践について

4.1 および 4.2 から、ピア・レスポンスをスピーチプランと原稿チェックに取り入れたことはスピーチの要旨や柱立てを考えさせる上で役に立ち、協働作業を通してモチベーションを高め、恥ずかしさを軽減させるなど心理面にも効果があったといえる。

また、自己評価からは目標を持って話すことの大切さやスピーチの改善に向けての気づきが見られ、他者評価からは自分と聞き手の考えの相違や良いスピーチをするために何をすべきかを学んだこともわかった。特に、ビデオ撮影はスピーチに対する意欲をかきたて、他者からの評価を視覚を通して明確に即座にわからせる役割を果たしていた。

アンケート調査およびレポートの結果から改善点はあるものの、ピア・レスポンス、ビデオ撮影を含む自己評価および他者評価は好ましい活動であったといえる。

さらに、「スピーチが上手になった」と回答した学習者が全体の 70% に達し、学習者の分析内容には文法に固執したコメントが見られなかった。これは、スピーチに求められる条件に対する学習者の意識変容と言えるだろう。

つまり、以上のことから本授業はスピーチの上達に役立つと考えられる。

5. まとめと今後の課題

本実践は、従来のスピーチの授業に関する聞き取り調査の結果を問題提起として、原稿執筆前の準備段階および原稿執筆後にピア・レスポンスを取り入れ、自己評価および他者評価を実施しスピーチが上達するための授業について考察した。アンケートおよびレポートの結果から、ピア・レスポンスは学習面と心理面に好ましい影響があることがわかった。学習面では協働で文法の確認や構成の修正をすることを通して、考える力、読解力が養われ、心理面ではモチベーションを高めたり心理的不安を軽減させるという効果もみられた。また、スピーチの改善点等が即座にわかるというビデオ撮影の利点が、スピーチに対する意欲をかきたてた。

さらに、他者評価からはパフォーマンスの大切さや自分と相手のスピーチに対する評価の相違を知り、スピーチを客観的に見ることから、良いスピーチをするために何をすべきかを学んだこともわかった。以上のことから、本授業は中上級学習者のスピーチの上達に役立つと考えられる。

しかし、一方でピア・レスポンスに関する 4.1 の 3 名の意見、聞き手のビデオ撮影、スピーチのタイトルの選択方法、他者評価の仕方、ペアの作り方について課題もある。また、今回はスピーチ自体の質の変化には焦点をあてておらず、授業時間の制約から各学習者につきピア・レスポンスの時間が約 20 分から 30 分であった。浅津・他 (2012) や Liu & Hansen (2002) が、ピア・レスポンスを授業に導入する場合、その実践的利用に時間的制約の問題があると指摘していることから、ピア・レスポンスの授業時間内における妥当な時間配分についても考えなければならない。

筆者は上述のアンケートおよびレポートの結果を課題とし、ピア・レスポンスの時間配分を考慮にいれ、スピーチ自体の質の変化にも焦点をあてながら中上級学習者のスピーチが上達するための授業および学習環境づくりについて、さらに実践を重ねていきたいと思う。

注

- (1) ピア (peer : 仲間) と学ぶことであり、対話をとおして学習者同士が互いの力を発揮し協力して学ぶ学習方法のことである (館岡 2005)。
- (2) 自分たちの書いた作文に対して仲間同士でコメントをしあうことである (池田・館岡 2007)。
学習者 (ピア) 同士がお互いアドバイスをし、読み手からのフィードバックを通して自分では気づかなかったことに気づかせてくれたり、多様な視点を与えてくれたり、また自分自身の読み手としての批判的読解の経験から自らの作文活動を意識的に振り返ることができるという利点がある。
- (3) 今学期、中間テスト前までの前半授業は9週、後半は中間テスト後の7週実施した。なお、前半9週目は中間テスト、後半7週目は期末テストである。
- (4) スピーチプランの最終チェック後、次の授業までに原稿を執筆しておく。
- (5) 後半の授業時間数および学習者数の関係から、一人3回の発表とする。
- (6) 5段階の評価は、◎ : 大変良い、○ : 良い、△ : 普通、▲ : あまりよくない、× : 悪い、である。

参考文献

- 浅津嘉之・田中信之・中尾桂子 (2012) 「学習者の意識分析から考える日本語作文授業における非対面ピア・レスポンスの可能性」『応用言語学研究論集』第5輯、金沢大学人間社会環境研究科、pp59-70
- 池田玲子・館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』、ひつじ書房
- 大田恵 (2009) 「話す能力・聞く能力を育てる思考の工夫—スピーチの系統的指導プランの作成と活用を通して—」『平成21年度前期教育研究員 研究報告書』30号、南部広域行政組合島尻教育研究所
- 國分康孝 (2001) 『心を伝える技術』、PHP文庫
- 東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会編 (1995) 『日本語口頭発表と討論の技術—コミュニケーション・スピーチ・ディベートのために』、東海大学出版会
- 館岡洋子 (2005) 『ひとりで読むことからピア・リーディングへ』、東海大学出版会
- 樽田ミエ子 (2000) 「実践報告 中上級学習者のための聞き手を意識したスピーチ指導の試み—

即興スピーチと評価スピーチー」『東海大学紀要留学生センター』 20号、東海大学、pp45-55

土岐哲 (2001) 「日本語のスピーチ教育」『日本語学』第20巻、第6号、明治書院、pp6-10

深澤のぞみ・陳会林・張鵬(2012) 「日本語教育におけるスピーチ指導の可能性—全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の参加校の取り組みを例として—」『応用言語学研究論集』第5輯、金沢大学人間社会研究科、pp16-42

藤田朋世・フランプ順美 (2009) 「ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの試み—重慶大学での実践報告—」『日本語教育論集世界の日本語教育』第19号、国際交流基金、pp199-213

藤長かおる (2001) 「海外日本語教育 Q&A スピーチの指導法」『日本語教育通信』第39号、国際交流基金日本語国際センター、pp22-23

吉満たか子 (2007) 「外国語授業におけるペアワークの有効性—ドイツ語授業での実践を基に—」『広島外国語教育研究』第10号、広島大学外国語教育研究センター、pp169 - 195

グエン, ソンランアイン (2009) 「即興スピーチにおけるピア活動の影響—ハノイ大学での「話す授業」の改善を目指して—」『日本言語文化研究会論集 2009年』第5号、政策研究大学院大学日本言語文化研究会、pp195-222

Liu, L. & Hansen, J.G. (2002) *Peer response in second language writing classroom*. The university of Michigan press.

<資料>アンケート調査の項目

①	【ピア・レスポンス】友達とペアになってスピーチプランや原稿チェック等をしました。これは、あなたのスピーチに役立ちましたか。その理由も書いてください。
②	【他者評価】友達からあなたのスピーチについてコメントをもらったり、友達にチェックしてもらうことについてどう思いますか。その理由も書いてください。
③	【他者評価】授業で、いろいろな友達のスピーチを評価しました。これはあなたのスピーチの役に立ちましたか。その理由も書いてください。
④	【自己評価】自分のスピーチについて評価しました。これはあなたのスピーチの役に立ちましたか。その理由も書いてください。
⑤	自己評価および他者評価の良い点、改善点等を自由に書いてください。
⑥	自己評価シートおよび他者評価シートの改善点等について書いてください。
⑦	ビデオ撮影について、あなたが思ったこと考えたことについて自由に書いてください。
⑧	スピーチのタイトルやペアの作り方等、授業についてあなたが思ったことや考えたことを自由に書いてください。